

アウグスティヌスの三位一体論

宮 谷 宣 史

三位一体論はキリスト教の神を問題にするさいに、その特徴を示すために使用される神学的表現である。キリスト教は天地を創造した父なる神と、罪人を救うためにこの世に遣わされた子なる神イエス・キリストと、この世界で働き続けている聖霊なる神を信じている。これは直接的な表現はないが、内容的には聖書の教えに基づくものである。そこで古代教会の人々は、この教えを信じただけでなく、その内容を理解し、説明しようと努めた。彼らはその際、当然のことながら、その生きていた環境世界の言葉、表現、思想を用いて聖書の真理の論理化を試み、福音を信者のみならず教会以外の人々にも理解してもらうことを望んだ。この課題を果たすことは、当時、ギリシア、ローマ、エジプト、バビロニアなどの諸宗教にしばしばみられる、いわゆる三位神の信仰から自らを区別するために必要であったろうし、特にユダヤ教との相違を示すために、また、宣教や教会形成、ないしは新しくより正確な伝統を築くのに重要であったが、しかし実際には容易ではなかった。そのためすでに早い時期から三位一体の神をめぐる様々な解釈が生まれ、意見や立場が混乱を引き起こし、対立するようになった。つまり、父と子と聖霊の関係をめぐって、いわゆる三位一体論争が起こったのである。

ここでは長い論争の歴史を辿ることはおぼき、アウグスティヌスの三位一体論を取り上げることにする。彼はこの主題に関して長い年月をかけて思索し、その結果を15巻からなる『三位一体論』(400-421年)にまとめて残している。本書は古代教会においてこの主題について著わされたものでは最大で、内容的にも優れており、一顧の価値がある。

歴史的に見ると、アウグスティヌスは丁度三位一体論争の終結後に、この問題について発言したことになる。そのため、彼において東西の主張が一応まとめられた形で出てくるし、同時にその問題点も明瞭にされる。また、彼の三位一体論が中世神学および宗教改革者たち、更に近代以降の新旧両教会に大きな影響を与えていることを考えると、この教理について考える際に、アウグスティヌスを取り上げることは十分意味があると言えよう。

—

すでに述べたごとく、アウグスティヌスが出現した時には、三位一体論争は一応の決着をみていた。ローマ帝国におけるキリスト教会内の対立を解決するために、コンスタンティヌス大帝自身が325年ニカイアで第1回公会議を開き、父なる神と子なる神イエス・キリストは神として同質であることを強調した信仰告白をまとめるために協力した。それでも三位一体の神をめぐる論争が続いたため、テオドシウス大帝は381年、コンスタンティノポリスで第2回公会議を開き、正統教会の立場をさらに明確にさせた。ここでまとめられた内容がコンスタンティノポリス信条において、神学的にも政治的にも共通の基盤を築き、帝国内の多くの教会の理解として受け入れられるようになった。そこでは、唯一なる創造主、父なる神と、生まれたが造られず、父と同質なる子と、父（と子）より出て、両者と共に礼拝さるべき聖霊への信仰、つまり三位一体の神への信仰が表明されている。この内容的には使徒信条とニカイア信条をミックスしたような構成で、歴史的には正統教会の信仰を代表するようになった告白は、神学的にみると「1つの本質、3つの実体」という三位一体論の理解を根本としている。アウグスティヌスは基本的にはこの教会の教理を受け継いだ。しかし、彼は伝統的信条の内容をただ受容して、それを繰り返すだけではなくて、彼なりに理解し、論述することを試みたのであった。

アウグスティヌスはまず、三一論を説明するために従来使用されていた表現ないし概念を問題とした。神は「1つの本質、3つの実体」をもっている、と言われる。これをギリシア語ではοὐσίαとὕποστασιςで、ラテン語ではuna essentia, tres substantiaeと表す。これで明らかなように、οὐσίαはessentia（本質）と訳され、ὕποστασιςはsubstantia（実体）に置き換えられているが、アウグスティヌスはessentiaとsubstantiaというラテン語には意味上の区別はないと考える。そして彼は、後者よりも前者の方を好んで用いる。彼によると、神はessentiaである。essentiaはesse（存在）から出たもので、神は存在そのものであり、従ってessentiaとは存在そのものの、不変的存在、つまり本質を意味する。この点、アウグスティヌスは、神に1つの本質とそれぞれに独自の3つの実体を認めたカパドキアの神学者たちとは異なる。新ニカイア派においては、3つの実体の方に重点が置かれるために、アレイオス派が批判したように、多神教的傾向を拭い切れなかった。もっとも、3つの実体という代わりに、3つのペルソナ（tres personae）という表現もすでに使用されていた。しかしアウグスティヌスによると、三位一体の神を「1つの実体、3つのペルソナ（una substantia, tres personae）」として説明することも十分ではない。なぜなら、ペルソナ（位格）は実体を有している筈で、しかも実体とは不変でなければ意味をなさ

ない。そのため、実体が1つで、ペルソナが異なるということは考えられない。3つのペルソナは3つの互いに異なる実体、ないしは本質をもってはじめて存在し得る。従って、三位一体の神を、1つの実体、3つのペルソナと理解して表現することは適切ではなく、これでは三神になってしまう。アウグスティヌスは神が一つの本質である点は認めるが、同時に3つの実体とか3つのペルソナである、とみなすことには多神教になる危険を感じたのである。

そこで問題にしなければならないのは、三位一体の神と言う場合の「3」という言葉の意味である。この「3」とは何か。この「3」はいかに解さるべきか。この点に関するアウグスティヌスの論議を私なりに敷衍して以下説明してみる。

三位一体論における「3」によって、父と子と聖霊の区別が意図されている。父は子でも聖霊でもない、子は父でも聖霊でもなく、聖霊は父とも子とも異なる、という事態を説明するために、「3つの実体」とか「3つのペルソナ」と表現し、「3」を用いる。しかし、この「3」によって、3つの何が意味されているのか。これを身近な例を挙げて検討してみよう。例えば、「3匹の犬」という表現がある。それは、3つのものがあり、犬という実体が3つに共通している場合の呼称である。では、犬と猫と猿が各1匹いたらどうか。この場合、3者に共通しているのは動物という概念であるから、「3匹の動物」と名付けうる。同様なことは植物についても言える。柿の木が3本あれば「3本の柿の木」、柿、桃、栗の木が各1本あれば「3本の木」、木に草がまじり、3種あれば「3種の植物」……などである。このように、アウグスティヌスは種と類という概念を用いて「3」についての考察を続ける。

では、父と子と聖霊の場合はどうか。この3つには何が共通しているか。例えば、「父」は共通していない。人間が3人いて、互いに友であるなら、友を3者を結ぶ概念とみなし得るので、3人を「3人の友」と呼べるが、このような意味で、三一の神を「3つの父」とは言えない。では三一の神の「3」とは何か。「3つのペルソナ」と表現されるが、これは適切か。複雑なのは、三一の神の場合、「一つの本質」という前提がついていることである。そして、3者にペルソナが共通している、とみなされている訳である。本質において1つなら、つまり、本質において互いに相違がないとすれば、ペルソナは類概念でもある。しかし、本質が同一で、数が3つあると解すれば、種概念でもある。しかし、本質が同一で、数が3つあると解すれば、種概念でもある。柿と桃と栗の木に共通している概念を用いて、3者を「3本の木」と称するように、父と子と聖霊にペルソナが共通しているので、「3つのペルソナ」と呼びうる。ところが、ペルソナとは神としての位格（神格?）を意味しているので、「3つの神格」と言えはしないか。3つの神格が1つになって1つの神であるなら、3つのペルソナでなく、1つのペルソナと言うべきではないか。父、子、聖霊の各々が神である

アウグスティヌスの三位一体論（宮谷）

なら、3者に共通な神という概念で包括し、「3つの神」でいいではないか。こうして、「3」という表現について論じていくと、先ほどの実体やペルソナについて検討したのと同じように、従来の三位一体論では多神教的な意味合いが強いことが明らかになってくる。

アウグスティヌスはここで、正統派の教会が「3つの神」という表現をさけつつ、しかも「3つの実体」とか「3つのペルソナ」と主張してきた理由に注意を向ける。我々は、勿論、このような事態が教理史的に見ると、モナルキア主義や、あるいはアタナシオスなどに代表される同質論に対するカパドキアの神学者たちの思想に負う点が多いことを知っているのであるが、アウグスティヌスは彼なりにこの問題を問いなおすのである。

まず、聖書が一神教の立場を固守しているので、三神と言うべきではない、と考えられる。これに対してアウグスティヌスは、聖書には三神と記されていないが、3つのペルソナとも書かれていないと指摘する。もし、3つのペルソナは聖書の表現ではないが、その教えと矛盾しないので差しつかえない、と主張するなら、父と子と聖霊に共通な神という概念を用いて、3つの神と言っても支障ないではないか。それは、アブラハム、イサク、ヤコブを3人の人間と呼ぶのに似ている。ここで、しかし、アウグスティヌスは自問する。論理的には「三神」とも言えるのに、なぜ、教会はこの表現を避けてきたのか。その意図は明瞭である。つまり、三神と言い表すことによって、神の唯一性、ないしは神の働きにおける同一性が否定されるのを危惧したからである。すると、神の三位性でなく、神の一体性の方に重点をおいて考えるべきではないか。神は、父、子、聖霊と呼ばれながらも、3者が同一の神である点が強調されるべきなのである。従って、これを「3つの実体」とか「3つのペルソナ」と解釈し、表現するのは適切ではない。すでにみたごとく、これでは三神と受け取られるからである。では、神の一体性をそこなわずに、しかも、三神になることをさけて、神の三位性を説明するにはどうしたらいいのだろうか。そもそも、三位一体論とは何か、また三一の神とはどのような存在なのか。

二

アウグスティヌスは回心前にキリスト教の主要教理に関する通俗的な知識をもっていた。そのため、例えば、ミラノで新プラトン派の書物を読んだ時、そこにキリスト教に類似した教説を見出して驚いたが、同時に、両者の違いにも気付いた。相違点の1つに、ロゴスの受肉が挙げてあり、受肉のキリストを認めることの重要性が自覚的に述べられているが、ここにアウグスティヌスの三一論の始めがあると見なしうる。

次に、彼が司祭になってからまもなく、ドナティストとの論争において、三位一体論が少し問題となる。ドナティストは、この点に関してはアレイオス派の影響を受けていたため、神の本質の一体性は認めるが、父と子と聖霊の同質性は否定した。更に、彼らは三位一体論を教会論との関係で論じた。ドナティストによると、洗礼の際に父と子と聖霊の名を称えるのには実際的な意味がある。つまり、父は平和を求めるもののみが神の子となることを、子は苦難を負うもののみがキリスト者になることを、聖霊は正しい生活を送る信者にのみ与えられることを示す。そして、三位一体の神の名をこのような意味で称える処にのみ正しい洗礼があり、また、そこにのみ正統的教会が存在する、と主張した。アウグスティヌスは、このような三位一体の神の解釈から教会の正統性や洗礼の有効性を論ずる態度に反対した。この後で、アウグスティヌスは更にアレイオス派そのものとの論争にはいり、説教や著作の中で三位一体論に言及するが、しかし、この教理に対する彼の解釈は別なカタチで展開された。

アウグスティヌスは三位一体の神をどのように理解していたのだろうか。これを調べるための、最も重要な資料は彼の『三位一体論』(de trinitate)である。本書において彼は『告白録』の中(第13巻11章12)ではじめて示した、しかしごく簡単に取り扱った彼独自の三位一体論を発展させ、見事に展開している。と言っても、純粋に学問的な関心から、ごく限られた教育ある読者を対象として筆を起し、20年以上にわたり書き続けられ、15巻からなる本書は、内容的には統一と体系を欠き、しかも思弁的であるため、理解するのが容易ではない。実は著者のアウグスティヌス自身この点を誰よりもよく意識しており、この本のなかで論述ないしは内容が難渋であると読者が思うに違いない、と表明している。そしてその都度、それと同時に、それでも共に三位一体の神の意味を探究していこう、と記し、呼びかけている。

そこでアウグスティヌスによる三位一体の神理解をみるために、本書における彼の論述の内容全体を簡潔にたどってみる。

アウグスティヌスは基督教の神が三一の神であることを重要であるとみなす。それは、聖書の教えるところであり、また、教会の伝統的な教理だからである。しかし、彼はこの基督教にとり重要な主題と真摯に向きあうとしている故に、すでにみたごとく、従来の三位一体論のもつ、用語上の、あるいは内容上の問題点を明らかにし、そのうえで彼独自の解釈を苦闘しながら試みる。

神の三位性を強調すると、三神に傾く危険性があることに気付いているアウグスティヌスは、まず神の一体性から出発する。彼によると、神は常に自己同一的である。この神が三一的であるというのは、あくまでも自己同一的である神自身の内部においてのことである。アウグスティヌスにとって、唯一の神とは常に三一神なのである。

そして彼は三位一体論を、1つの本質、3つのペルソナ、という伝統的図式で捉えず、関係（relatio）という概念を導入し、1なる神の中における3つの関係とみなし、更に、この三一なる神の人間及び世界に対する関係にも注目する。そして、神のうちににおける三一性を、人間の精神における三一性と対比することを通して説明しようと企てる。アウグスティヌスが、三位一体論を神に内在的な三一性とみなし、これを人間内部にある三一性との類比によって論じうる、と考える根拠は何であろうか、それは次の2つである。まず、目に見えない神は自己を啓示する神であるから、彼の本質である三一性も、被造物を通して人間に理解、認識される仕方では示されている、と考える。次に、人間は神の像に似せて（ad imaginem dei）造られた存在であるから、その内に神との類似性を有していることになる。では、両者の間にどのような三一的アナログアが認められるのであろうか。

神の似像である人間のうちには神の三一性の投影、ないしは残像がある。神は本質的に三一的存在であるから、その内に三一的关系をもっているが、それが、父・子・聖霊という関係である。この三一的关系は他の三一的关系に置き換えて説明される。例えば、永遠、知恵、祝福とみなされうる。人間の精神構造のなかでこれらに対応するのは、記憶、知解、意志の3つである。記憶とは、過去において経験したことを貯えていること、また、信仰を保持することで、永遠に存在する父なる神に通じ、知解は、現在的事柄を把握し、真理を直観しようとする営みで、知恵なる子に対応し、意志は、将来の目標へ向かい努力すること、また、神へ帰依しようとする働きで、神的祝福及び救いをもたらす聖霊と関連しているので、人間に対する神の働きと人間の精神の作用との間に類似性を認めうる。

アウグスティヌスは人間にある三一性を、精神、認識、愛の3つによって表す場合がある。精神は父なる神へ向かい、彼と交わる場所であり、認識は、知恵である子に向かう理性の自己確認であり、愛は、聖霊に向かう理性の自己表現である。一般に最もよく引照される例をもう1つ挙げると、それは愛のもつ三一性である。つまり、人間の愛には、愛するもの、愛されるもの、愛そのもの、という3要素がある。そして、この3つが、神における父、子、聖霊の关系到類似していることは説明を要しないであらう。

さて、以上あげた例において重要なことは、3つのものがバラバラにあるのではなく、3つが3つとして関係しておりながら、1つである点である。第一の例では、過去、現在、将来という歴史的時間において一体であり、最後の例では、愛が自らのうちに3つの要素をもっていること、逆に言えば、3つのものから1つの愛が成り立っているという点である。

このようなアウグスティヌスの立場を内在的三位一体論と名付けうるであらう。あ

るいは心理学的とか思弁的とか呼びうるかも知れない。しかし、神の三一性が神の内部におけるものとしてだけでなく、人間の存在との関連で論じられていることに注目すべきである。アウグスティヌスの三位一体論において神と人間とのアナログアが語られる場合、それは単に存在の類比だけでなく、実存の類比（*analogia existentis*）という面をもっており、さらに働きにおける類似性が考慮されている点も注目すべきである。なお三一的關係が、神と人間に内在して対応しているだけでなく、歴史における両者の関係という救済史的側面のあることを見落としてはならない。アウグスティヌスが三位一体論を重視するのは、受肉したみ子イエス・キリストによる人間の救いの道すじを明確にするためであり、更に、歴史の中で、人間が聖霊により、キリストを通して、父の許へ至る道を考えるためであった。これを説明するのに、彼は関係という概念を導入したのであった。

ところで、アウグスティヌスは関係という概念をアリストテレスから借用し、また、テルトゥリアヌスやナジアンゾスのグレゴリオスなどから学んだが、しかし、神と人間における三一性を関係として把え、両者を対比して展開させたのは彼が最初であった。ここに彼の三位一体論のもつ独自性と歴史的意義がある。

三

アウグスティヌスは神の三位性を表すペルソナという言葉を用いず、それを神に内在する働きの関係として把え、独自の三位一体論を示したが、しかし、ここに彼の解釈の問題点もある。神の三位性を内在的關係とみなすと、各神格の人格的な面が弱まり、神秘的な色彩が強まるし、更に、再び様態論に陥ってしまう危険性がある。また、三一性という神の本質に関わる奥義を、人間の精神構造およびその働きとの対比によって説明出来るのかどうか。

実はアウグスティヌス自身が、彼の三位一体論のもつ問題性にすでに気付いていた。彼は、人間が神の似像であることに着目して、両者における三一性の関係を類比によって説明するのだが、この試みが、結局、不類似性を明確にする類似に過ぎないことを知っていた。では彼の努力は無意味なのであろうか。アウグスティヌスはこの事態を愛とその表現の關係にたとえる。愛を表すために人は贈り物をする。贈り物は愛そのものではないので、両者は区別されなければならない。しかし、贈り物は愛を示す。つまり、人は贈り物を通して、愛が確かに存在することを知り得るのである。同様に、人間にある三一的構造は神の三一性とは異なるが、それを媒介にして神を知る縁にはしうる。ただ、実在するものについての表現は多様で、しかも言葉による場合は限定されるので、その1つをもってすべてを包括することは不可能で、従ってア

アウグスティヌスの三位一体論（宮谷）

ナロギアによる説明も部分的なものにしか過ぎない。このように、アウグスティヌスが人間の論理の限界を自覚しながらも、なお神についての神学的思索を試みたのは、彼の信仰の姿勢によるものといえよう。

アウグスティヌスは生涯、神を慕い求め続けた求道者であった。彼はただ求めただけでなく、信じている神を知解しようと欲した。彼にとっては、信仰とは解からないことを求めることで、理性とは分からないことを見出そうとする努力であった。これは、信仰が求めていることを、理性が知解出来ないことを発見することをも意味する。それによって、ますます信じている神の偉大さを知り得るのだと、アウグスティヌスは考えていた。三位一体論とはまさにこれに当たる。神的三一性の奥義が人間の内面に反映しているとみなし、人間の不可思議な精神を知ろうと努力することにより、神の神秘にせまろうと試みるのであるが、実は、この類比によって、両者の絶対的な相違が明らかとなるのである。それにしても、アウグスティヌスは回心直後からその生涯の終わりまで、神と自己を知ることが欲し、そのための努力を止めなかった。彼が、司教としての多忙な生活のなかで、20年以上も費やし、大著『三位一体論』と取り組んだのは、その努力の一つの現れであった。この人間の神学的営みが、たとえば、中世に遡る伝説でルネッサンス期に多くの画家たちが描いている一場面、つまり、海岸で三位一体論について思索するアウグスティヌスと小さな杓で大海の水を汲みあげようとする小児との対話、共に不可能なことを繰り返している行動に似ていることを、彼は誰よりもよく知っていた。それゆえに、アウグスティヌスは、第15巻の最後の章を長い祈りで結んだのであった。

「私の神、主よ、あなたを求める力を与え給え。……私の力と無力、知識と無知はすべてあなたによっています。門戸を開いて下さい。あなたを愛する愛を増し加えてください。……1つにして3なる神よ……私をあなたの許に止まらせて下さい。

アーメン」

四

最後にここで以上の論述の典拠になっているアウグスティヌスの『三位一体論』そのものについて少しふれ、その内容を簡単にまとめておく。

アウグスティヌスが若くして書き始め、老年になってから完成した、と自ら記しているごとく（手紙 174）、本書は20年以上の歳月をかけて執筆された。この本は全15巻の完成前に原稿の1部が持ち出されたか、盗まれるかして人々の手に渡ってしまった（手紙 174：『再考録』Ⅱ，15）。なお執筆の過程、あるいは完成の過程を年代的にみると、およそ次のようであった（T. テセル）。

第1巻-第4巻（400-406年）、第8巻（407年）、第5-第7巻と第9巻-第12巻（413-416）、第13巻-第15巻（418-421年）。

この年代をみると、アウグスティヌスがヒッポの司教に就任した396年ころからドナティス論争に関わりはじめ、412年からは晩年のアウグスティヌスを悩ませたペラギウス論争が始まる。それに410年の帝国の首都ローマの掠奪により歴史的な変動に遭遇し、それに、アウグスティヌス自身この問題と取り組み、413年から426年にかけて大著『神の国』の公刊を開始した。丁度このような多忙で、かつ論争のために困難を極めた時期に三位一体の神についても思索を持続し、その成果を少しずつ発表している。アウグスティヌスの著作活動はたいてい外部からの依頼か、あるいは何か具体的な問題が生じたさいに、それと取り組んでいく過程で成立した場合が多いが、『三位一体論』の執筆に関してはそのような外的な事情はあまりない。ということは、この主題に関する思索と論述はすべて彼自身の内面から生じたものであった。このことは三位一体論がアウグスティヌス個人にとり、信仰的にも神学的にもいかに重要な課題であったかを示すものと言えよう。しかも第1巻のはじめ（第4章7）で述べているように、彼は執筆にさいして彼以前に当主題に関して書かれた文献を出来る範囲ですべて調べたのであった。本書を読むと、アウグスティヌスが実際に「知解を求める信仰」をもって生きていたことを痛切に感じ取れる。彼は本書の読者にむかって同じような態度をとるように呼びかけている。

「この本を読む方は、……私と一緒に歩もうではないか。

……私と一緒に探究しようではないか。」（第1巻3章5）

以下、アウグスティヌス神学の独自性とその素晴らしさを示す『三位一体論』により彼の思索のあととその内容を簡単に記しておく。

本書は全体としては、大きく2つの部分に分けられる。

第1部（第1巻-第7巻） 聖書による三位一体論の論証

第2部（第8巻-第15巻） 神の三一性と人間精神における三一性との対比による
考察

第1巻 三位一体の神、つまり父なる神、子なる神、聖霊なる神は3つの神ではなくて1つの神であるゆえに、その実体を直視し、十分に理解し、またそれを適切に表現することは困難であり、誤解される場合もある。しかし信じていることを理解しようと努めること、困難な主題でも探究し続け、出来る限り説明するように励むことは大切であると、強調する。そして三位一体に関する聖書の箇所を検討を行い、三位一体の神の統一性と同等性が確認される。

第2巻 神における3つのペルソナの同等性が旧・新約聖書から論証され、また神の顕現の様態が、たとえば、父なる神が子なる神を派遣する、というように互いに異なっているようにみえても、神の3つのペルソナにとっては同じである、と結論される。

第3巻 神の可視的顕現の意味が探究される。聖書には神が可視的な被造物を通して自らを顕現する例が見いだせるが、それらは神の意志によって起こるとしても、神の子と聖霊の啓示とは相違している。

第4巻 イエス・キリストが父なる神によってこの世に派遣された目的と意味が問われる。神の言葉がみ子であり、この言葉が受肉したのであり、またみ子は神の知恵である。したがって子は父に派遣されたゆえに従属するのではなく、両者は同等であり、父は子において自らを啓示するために、子は自らにおいて父を現すために派遣された。

第5巻 三位一体の神について思索し、知解したことを表現することの困難さ、人間の思惟と言葉による説明の限界について改めて言及したのち、アレイオス派の立場の批判を始める。アレイオス派は、父は生まれざる者、子は生まれた者であるゆえに、父と子の実体は異なる、と考え、父のみを真の神であると主張する。これに対してアウグスティヌスは、父と子の相違は両方の実体にあるのではなくて、関係にある、とみなす。そして3つのペルソナ、父、子、聖霊の関係を現す名称と理解し、三位一体の神について新しい説明を展開していく。あるひとが友人と呼ばれだすのは、その人に対する関係を現すのであって、その人の人間としての実体に変化が生じるのではない。また、お金が保証金と呼ばれるのは、そのお金に対する関係から生じる名称であって、そのお金自体の実体が異なっていることを意味しない。このように、父と子、産むものと生まれた者は、関係的な名称であって、実体の異質性を示すものではない。

8章9節から11節にかけて「3つ」「実体」「本質」「ペルソナ」などの三位一体論の教理にとって基本的な概念の意味が綿密に考察されている。関係概念の導入と援用による解釈は特に注目に値する。

第6巻 前巻では「私と父は1つである」（ヨハネ福音書10, 30）をめぐる議論されていたが、本巻では「神の力、知恵なるキリスト」（第1コリント1, 24）を手がかりに父と子の関係を探り、両者の同等性を明らかにしていく。

人間精神における諸徳は別々でも互いに分離はされていないように、神の力は多様に表示されるが、そこには統一性がある。

神は三位一体であるゆえに、3つであるとか、互いに分離しており、父・子・聖霊は3つのときよりは小さいと考えるべきではなく、三位一体それ自体が唯一の神であることが力説される。これはアウグスティヌスの基本的な見解である。神は三位一体なのである。

第7巻 前巻で十分論議しつくされなかった「キリストは神の力、知恵」という聖書の表現の意味が探究される。そして、父・子・聖霊は1つの方、1つの知恵であること、したがって3つのペルソナは1つの本質、1つの神であると結論される。

なおここでは第5巻で吟味された三位一体における3つとは何か、3つのペルソナという場合の3つとは何か、という問題をめぐり、類概念、種概念、個概念を用いて詳細に検討される。

第8巻 本巻からアウグスティヌスは三位一体の神について思索の視点を変えて、神における三一的關係を人間精神における三一的構造をもつものとの類比によって論ずる方法をとるようになる。

神は愛である（1ヨハネの手紙4, 7以下）。人間が神を知りたいと望むのは神を愛するからである。神を知ることが、愛とは何かを探ることでもある。では人間が神を愛するという場合、その愛とは何か。愛には、愛する (amans)、愛される (amatur)、愛そのもの (amor) という3つの面があり、しかもこの3つは愛という点において1つである。こうして神と人間の関係に目を向けると同時に、人間の内面における三一性が示唆される。

第9巻 神の似像である人間の精神 (mens) における三一性 (trinitas) が究明される。前巻の愛する者、愛される者、愛そのものという三位一体性との関連で人間精神そのものの三位一性がさらに考察される。愛する精神はその愛において存在し、愛は愛している精神を知ることのなかに存在し、知は愛していることを知ることを知っているその精神のなかに存在している。このような精神 (mens) と愛 (amor) と知 (notitia) は互いに関連しあいながら存在し、1つの実体、ないしは本質をなしている。

第10巻 人間の精神は自己をよく知ろうとする。人間の精神は自らがよく生き、想起し、和解し、意志し、判断し、疑うことを知っている。精神が自己を知るとき、人間精神の実体を知るのである。そこで精神が自己を知るうえで大切な働きは、自己が生きていること (vivere)、記憶すること (meminisse)、知解すること (intelligere)、意志すること (velle) を思惟することである。この人間精神のもつ基本的な働き、つまり記憶 (memoria)、知解 (intellegentia)、意志 (voluntas) は、3つの生でなくて1つの生 (una vita) であり、3つの精神ではなく1つの精神 (una mens) であり、したがって3つの実体ではなく、1つの実体 (una substantia) である。3つは互いに関係するという視点からとらえるときに3つなのである。記憶も知解も意志も人間全体に関わるゆえに3つでありながら1つである。

第11巻 人間の精神における三一性の指摘から、外的物体を知覚する感覚における三一性の問題へ移る。そのさい、特に視覚によって見られる物体、次にその物体を見る人の視覚によって捉えられる像 (visio) ないしは視覚によって刻印された物体の似

像、そして最後に、両者を保持し結合させる意志の集中的注意力（*intentio*）、この3つは互いに等しくはなく、また1つの実体に属してもいない。しかしこの3つは精神の働きと関係させて考えるとき、三一性をもっていることが明らかになる。つまり、記憶の中にある物体の似像、物体に眼差しを向ける時に刻印されたもの、この両者を結合させる意志の力の3つは、一体として働いているのである。

第12巻 神の三一性はその似像である人間に属する3つの人格、男、女、両者の結婚によって得られる子において現れていると考えるべきではなく、各個の人間のなかを探られるべきである。アウグスティヌスは人間精神の働きとして知恵（*sapientia*）と知識（*scientia*）を取り上げ、両者の区別を明らかにする。知恵は永遠的なものの知性的認識に関わり、知識は時間的なものの理性的認識に関わる。アウグスティヌスによると、人間は感覚的な認識から、時間的事物の理性的な認識をへて、永遠的事柄の知性的認識に至る。この内的な上昇をすることにより三一性を見いだすようになることが期待される。

第13巻 知識と知恵の問題が人間の状態に即し、かつ神との関連で議論される。

人間は外的な部分である身体と内的な部分である魂を持っている。前者を知るためには肉眼を、後者を知るためには心を用いる。問題は見えないものを見る心である。アウグスティヌスは人間は信じるなら、人間は心にあるものを見ることが出来ると考える。見えないものを信じるのが信仰である。信仰は心の中にあり、心によって存在する。信仰は不在なものを現在とし、外にあるものを内在とする。

キリストは人間に時間的なものについて信仰を与えるのみでなく、永遠的なものについての真理を示す。コロサイ書第2章3節にあるごとく、キリストがわれわれの知恵であり、知識である。それを知ることが信仰である。

第14巻 人間は自己を記憶し、自己を知解し、自己を愛する。このような精神をもつ人間は、神の似像として神を想起し、神を知解し、神を愛することが出来る。

第15巻 はじめに第1巻から第14巻までの主題とその内容が要約されて述べられる。

人間はその精神の働き、記憶と知解と愛によって神を想起し、神を観想し、神を喜ぶようになることが大切である、と今一度強調される。そして人間がこの3つの能力をもちながら、1つの人格であるように、神は1つであるが父・子・聖霊という3つのペルソナをもっている。しかし、人間の精神における三一性に神の似像を見て、神の三一性を理解しようと試みてきたアウグスティヌスは、それが結局、鏡を通して神を見ようとすることで、むしろ人間と神の比類似性しか明らかにしえない、と告白するに至る。そしてこのへだたりの説明を求めるよりは、聖書の言葉を信じるのが望ましい、との考えを述べる。

最後は先にふれたように、長い祈りにより締めくくられている。

なおアウグスティヌスは本書以外の書物でも三位一体論を扱っている。そのなかで特に次の3つの著作が本書との関連で重要である。

『真の宗教』(390年)、第7章13節と第11章21節以下。ここでアウグスティヌスは神に創造された人間は存在(esse)と形(forma)と秩序(ordō)という三一的存在の様相を所持していると述べている。

『告白録』(397-400年)、第13巻11章12節では、人間にみられる三一性として、存在する(esse)、知る(nosse)、意志する(velle)を挙げている。

『神の国』(416-420年)、第11巻26章においても同様に人間の精神に認められる神の三一性との類似性を示すものとして、存在する(esse)、知る(nosse)、愛する(diligere)の3つがある、と述べている。

『三位一体論』のなかで、特に第9巻と第10巻の叙述から、また上に言及した箇所から言えることは、アウグスティヌスによると、存在と知と愛の3つは互いに関係しながら1つで、神の本質に属するものであると同時に、神の似像である人間にとっても基本的なものである。そして創造者なる神が人間に存在を与え、また知恵なるみ子が人間に知恵を与え、聖霊なる神が人間に愛を注いでいることを明確にしようとしている。そしてそのような働きをする神は1つのペルソナであり、またそのような神による被造物である人間もその精神のなかにこの3つの働きをもっている1つの生である。アウグスティヌスによると神の本質とその働きは1つであり、また人間においても、その働きはその本質からでてきているのである。この意味において神と人間精神の間には、類似性をみることができよう。

この点に、つまり、1つのペルソナにおける3つの働き、あるいは、1つの人格における3つの互いに関係しあう働きの存在、という観点による解釈のなかにアウグスティヌスの三位一体論の特色と独自性があると言えよう。

アウグスティヌスの三位一体論（宮谷）

付 記

アウグスティヌスの三位一体論に関する研究は多いが、彼自身の著作『三位一体論』に基づく理解が一番大切である。そして幸いなことに現在、本書の邦訳が2種類ある。

中沢宣夫訳『三位一体論』、東京大学出版会、1975年。

泉治典訳『三位一体論』（『アウグスティヌス著作集』第28巻）、教文館 2004年。

泉訳には詳しい解説が付してある。

なおラテン語テキストとしては次のものが多い。

J. Mountain, ed., *Corpus Christianorum Latinorum* 50/50A.

ラテン語テキストと翻訳を載せ、それに詳しい解説と註を記し、また詳細な文献表をつけて、研究のために有用なものとしては、特に次の2冊を挙げておきたい。

P. Agaesse et J. Moingt, *La Trinité*, in: *Oeuvres de Saint Augustin* 15 et 16, Desclée de Brouwer, 1955.

A. Trape, M. F. Sciacca, G. Beschin, *La Trinità*, in: *Nuova Biblioteca Agostiniana* IV, Roma 1973.

15巻のうち7巻のテキストと翻訳しか載せていないが、新しい研究をふまえた詳しい解説を施してある本として次のものを挙げておきたい。註と文献表つき。

J. Kreuzer, *De Trinitate*. Hamburg 2001

基本的な文献としては次のようなものが参考になる（年代順）。

M. Schmaus, *Die psychologische Trinitätslehre des hl. Augustinus*, Tübingen 1927.

A. Schindler, *Wort und Analogie in Augustins Trinitätslehre*, Tübingen 1965.

O. du Roy, *L'intelligence de la foi en la Trinité selon saint Augustin. Genèse de sa théologie trinitaire jusqu'en 391*, Paris 1966.

E. Hill, *The Mystery of the Trinity*, London 1985.

論文も含めた詳しい研究に関しては次の事典の項目を参照のこと。

R. Williams, *De trinitate*, in: A. D. Fitzgerald, ed., *Augustine through the Ages*.

An Encyclopedia, Michigan/Cambridge 1999. 845–851.